小田原俳句協会報

理事会だより（10・10）

一、令和6年小田原秋季俳句大会につき長谷川副会長、担当の須田聡子理事より実施報告。（事業部）

二、第61回梅まつり俳句大会（七年二月九日）の投句案内を各グループに本日配布、外部へは郵便料金の上がる前に送付済み、既に投句あり。（長谷川副会長、担当の米山理事）（事業部）

三、秋の吟行会（十一月七日）の参加見込みは約二十五名。（事業部）

四、合同句集は十月十七日、二十二日に一次・二次校正予定。（山田委員長）

五、新会員：本多登美子さん（零の会）、大澤紀子さん（こよろぎ）。（総務部・会計部）

理事会日程　12／12　1／9　2／13
（毎月第2木曜日　けやき15時より）

「俳句おだわら」10句抄（686号より）

岡本史郎　抄出

狩行星（ぼし）みつけるまでを夕端居　池田　忠山
にんげんを見ている風の青大将　大石　雄介
耳ふたつ夏逝く風とすれ違う　小澤　園子
花野原いづれひとりの樹木葬　小林永以子
七夕竹不戦の文字の確とあり　瀬戸　悠
樟脳舟ひたに走れり友逝けり　瀬戸　りん
旧友の変はらぬ文字や秋暑し　武居裕美子
六十年二人三脚汗の染み　中根登美子
晩夏光戦下の子らの明日祈る　原　仁子
梅雨明けにけりういらうの銀の粒　守屋　まち

瀬戸りん　抄出

邪気払ふ力士の四股や土用入　川本　育子
退屈の誰かが開ける冷蔵庫　和田恵美子
新涼や青空市のブレイキン　田中　恵一
缶ビール買ひて始まる旅路かな　肥後ちさこ
ちちの句の揺れて風鈴ちりちりん　廣田　悦子
月光にほぐるる雲や蟬生る　中山智津子
かつこつと首振る父の扇風機　青山　典仁
空蟬の爪のくい込む葉裏かな　中村　裕子
老いて似る姉妹のしぐさ心太　一ノ瀬茂代
炎天へ出でむと深き息ひとつ　山田　照子

令和6年度小田原秋季俳句大会

事前投句の兼題「案山子、柿」に対し一六二名五一二句の投句、十月六日当日の部に五四名の参加を得ておだわら市民交流センターに於て開催した。小田原市から安藤副市長、大川市議会議長を来賓としてお迎えし祝辞をいただいた。

兼題入賞作品

小田原市長賞

木守柿生家は鍵のいらぬ里　中村　秀子

小田原市議会議長賞

ランドセル案山子に預け道草す　鈴木　智美

小田原俳句協会会長賞

熟れ柿や崩れしままの登り窯　中村　敬

以下俳句協会賞（二十位まで）

実りゆくものの静けさ夜の案山子　荒　理依子

案山子立つ移住夫婦の子沢山　金子　正治

分かち合ふ里の暮しや柿日和　荒　理依子

キリストのごとく担がれ来し案山子　岡本　保

道問へば答へさうなる里案山子　山田　照子

干柿のやうな齢となりにけり　奥村　ゑこ

木守柿村は出て行く人ばかり　長谷川きよ志

柿一つ残して空の定まれり　硲　百合子

腕白の速き逃げ足禅寺丸　塩沢　蘭幽

甲斐駒の風にみがかれ百匁柿　田中　幸子

過疎なれど終の住家や木守柿　杉本　三明

夜は星の語り部となる案山子かな　大澤　秀子

柿簾今年も母は達者です　上原　華子

体温の残る案山子を捨てにけり　豊田　幸枝

孤独とはとどのつまりは柿のへた　杉山あけみ

通勤の日々に親しき案山子かな　高橋久美子

すでにもう農夫の顔して案山子佇つ　尾崎　竹詩

選者特選賞

小田原俳句協会名誉会長　佃　悦夫特選

天目に柿盛り付けて宇宙かな　鈴木　智美

小田原俳句協会顧問　大石雄介特選

渋柿に痺れし舌が邪魔になる　瀬戸　悠

小田原俳句協会会長　村場十五特選

柿喰うて流離の思ひあふれけり　神山つとむ

青梅の会代表　田中幸子特選

分かち合ふ里の暮しや柿日和　荒　理依子

おほゐ俳句会代表　小野菊土特選

柿喰うて流離の思ひあふれけり　神山つとむ

小田原鹿火屋代表　近藤久江特選

雀等に慕はれてゐる案山子かな　関根　洋子

当日題入賞作品（席題「秋季雑詠」）

小田原俳句協会会長賞

海原に月光といふ銀の帯　肥後ちさこ

（以下二十位まで）

継ぎはぎの縄文土器や天高し　西郷　節子
露けしや鋼（はがね）の匂ふ花鋏　陌間みどり
鶏頭の本気の色の重さかな　田畑ヒロ子
字面まではは似と言はれ秋茄子　田中　幸子
不意といふ悲しみありて花木槿　山田　照子
割れ石榴戦さの血とも泪とも　佐々木重満
草の花働けること誇りとし　近藤　久江
背負籠のいちばん上の山葡萄　星　一義
身に入むや摩耗劣化の世界地図　内田知江子
爽かや少年剣士空（くう）を裂く　鈴木　幸子
秋日連れ小田原城が歩きだす　大石　和子
筋書の立たぬ余生や秋の雲　中村　昌男
露ひかる展望台の方位盤　土屋　節子
日めくりの一日一句秋深む　竹本もりえ
秋落暉川の底まで染めてゆく　加藤かほる
組体操扇決まるや鰯雲　中田　笑子
教会の屋根のクルスや小鳥来る　川本　育子
秋麗の少したいくつ釦穴　杉山あけみ
どうみてもはしゃぎすぎてる稲雀　荒　理依子

俳句おだわら（10・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（9・27）　久江報

美しき罠秋蜘蛛の囲に捕はるる　足立　和子
竜淵に函嶺雲を呼ぶ気配　川本　育子
名月や胎児の産まれ出るごとし　高橋　小糸
竜淵に日暮の雨の静かなり　山﨑　悦子
竜淵に潜むや墨の片減りす　近藤　久江

◆山北（9・26）　由里子報

秋空や居間から見える丸き山　和田恵美子
敬老日この楽しさは宝もの　尾崎　幸子
先客は猫か良夜の駐車場　星　一義
雲水のつま先潔し秋の声　石田加津子
飛鳥期の「九九」の木簡秋の声　竹下由里子

◆こよろぎ（10・10）　つとむ報

重陽や母へと届け祝ひ膳　大澤　紀子
流星の音ひとつなき御（み）空かな　髙杉掘三朗
十六夜の流れる雲のはやさかな　板谷　雅泉
だれとなく触るる瓢や無人駅　植松テル子
交（まじ）はりは淡きにしかず彼岸花　神山つとむ

◆香雨・梅ごち（9・22）　忠山報

空といふ大海原に鰯雲　肥後ちさこ
ぐづる子を月にあづけてあやしけり　関戸わよこ
かけ声に一瞥の人赤い羽根　青山　典子
駅弁を開く鈍行豊の秋　門松　鳳文
手品師のやうにかろやか松手入　吉田　百代
はじまりは雅楽のしらべ観月会　吉田　康雄
月光に隠しやうなき隠しごと　陌間みどり
外に出でてしばしくつろぐ良夜かな　小澤　純子
狩行待つ向う岸にもまんじゅしやげ　池田　忠山

◆春野（9・15）　きよ志報

光とび風が転んでねこじやらし　秋山　昇
イヤリング色なき風の中にかな　伊藤はる子
追分で別るるつもり秋茜　内田知江子
酔芙蓉一日一生無一物　尾崎　一夫
鯊を釣る腕の刺青タランチュラ　瀬戸　悠
秋の声聞きたくて立つ風の橋　二見　和江
持ち帰るピザと猛暑と夕暮と　長谷川きよ志

◆沈丁（10・3）　寶子山報

天高し吊橋に足震へをり　若村　京子
足業で勝名乗りあげ相撲取　柳澤ミサ子
夕空に大の字となり鳥渡る　田中　惠一
よつぱらい今日も我が家はとろろ飯　河本　純子
花野道足腰強し百歳遠し　勝木　澄子
引越しの挨拶先づは小鳥から　菅野　英余
おしやべりと小鳥の声とウオーキング　髙井　幸子
野ざらしの木の椅子一つ小鳥来る　片野　節子
目薬の頬をこぼるるそぞろ寒　峯尾ユキエ
秋深む茶すする音とまほうびん　清水美代子
杖頼る母の右足九月場所　松下　俊之
音符のごと仔犬の足跡秋の浜　武居裕美子
小鳥来る落ちてきさうな空がある　寶子山京子

◆みなみ（9・14）　かほる報

きしませて閉じる校門秋夕焼　加藤　健治
赤蜻蛉夕日の中より生れたる　市川めぐみ
終バスは夕日にむかい芒原　豊田　幸枝
霧晴れて風透き通る芒原　斉藤　静
秋夕焼心の塵の消えており　小瀬村信子
南瓜食み戦後生活語る母　柳川　紀枝
家一軒燃えてるような秋夕焼　加藤　富江
季語の無き俳句風無き芒原　加藤れい子
秋夕焼どの景見ても母郷かな　加藤かほる

◆青梅（10・7）　幸子報

赤とんぼ幼子くるくる指まはす　大塚　行人
長茄子の葉影に細き光ゆれる　湯本とし子
天仰ぐ身の空洞の秋思かな　加藤まり子
農日記酷暑の文字の続きをり　久保寺トミ子
傍らに点眼鏡おく虫の夜　田中　幸子

◆おほゐ（10・9）

山間の川音粗し秋の雨　きよ子報
丹沢は神の懐薄紅葉　髙橋みどり
秋さぶや夜は獣の渡る橋　中根登美子
一つ知り二つ忘れて秋の風　中村　昌男
よろしくと秋桜束ね手土産に　中津川晴江
風の橋秦野盆地と柿畑　廣田　悦子
秋草や小首傾げた童地蔵　安池　利枝
濡れそぼつ風の吊り橋雁渡し　二上　光子
吊り橋の思い出ゆれる秋の雨　横塚　昌平
鷹柱吊り橋すでに米粒に　石井千代子
吊り橋を抱く丹沢紅葉待つ　小野　菊土
秋草のひとつひとつの吐息聴く　香川　花子
霧のぼりやがて雄々しき丹沢山　加藤　春江

◆実のり（10・16）

礼状を書き直したる夜長かな　石井きよ子
ふと目覚め雨音を聞く夜長かな　たか志報
奥能登のランプの宿の夜長かな　荒井ちゑ子
発表のピアノをさらふ夜長かな　岩本ひさみ
秋茄子を焼きて独りの夕餉かな　杉本　久子

◆鷹（10・5）

朝顔の種や観察日記果つ　木村　幸枝
火男の面の朱唇や秋暑し　新井たか志
遠き地の葬りへ祈る鰯雲　十五報
庭の木の葉騒かそけき今朝の秋　池田　令子
減塩を夫に合はせり水引草　西賀　久實
蜩や展望台に見る入り日　佐宗　欣二
名月や息子が父の顔になる　中田　笑子
月影やデータセンター窓皆無　百川　秀子
秋天や鯛の跳ねたる間祝着　山﨑美知子
秋うらら間伐材に椅子生まる　柏木　良花
アパートの狭間の畑やあかとんぼ　庄司　下載
月光や駱駝は海の夢を見る　瀬戸　りん
盆僧の島より戻る小舟かな　高橋久美子
工房に積もる無垢材小鳥来る　中山智津子
撮影のポーズいろいろ七五三　齊藤　桂
生意気な口利く男今年酒　芹澤　常子
　　深澤　一華
　　大木　敬子
　　大島美恵子

菊の香や長押に水の照り返し　田下　昌人
鳥好きの人の面影木槿咲く　中根　和子
虫の音や夜の帳のおりし窓　加藤　幾代
押して入り引いて出るドア秋澄めり　高橋千代子
我が影の十頭身や秋夕焼　守屋　まち
あつあつの焼芋今日も生きてゐる　米山　翠
朝影や門扉の上の露の玉　來田　新子
秋空を逆しまに切り大車輪　青山　典仁
大福の粒あん好きの夜業かな　大沢　年子
海峡の大吊橋や望の月　小林　環
露しぐれ利尻の山は消えにけり　澁谷　明子
朝顔や青きインキのエアメール　下平　美子
向かうにも言ひ分のあり鰯雲　鳥海　壮六
銀杏を干すや前山紅ふかし　古屋　徳男
無花果や嗚呼と彼(か)の名の甦る　村場　十五

◆零（10・17）　史郎報

雑草にもすべて名のあり草の花　青木たけを
よく転ぶ露の世のあまりに疾(はや)く　伊藤　道郎
朝まだき柿の枝葉に銀の露　川合　昌子
それぞれに愚痴は語らず良夜かな　佐藤　正子
聞き役の八千草薫草の花　中村　裕子
他愛なき会話が生甲斐秋暮るる　野川木一路
朝露のころんころんと笑いけり　本多登美子
十月桜咲く半世紀越えの無罪　岡本　史郎

◆草むら（10・19）　重満報

新米やご飯の供は不要なり　石井　秀稀
秋灯やいつも土足の父だった　佃　悦夫
ひもじさを知らぬ子供ら諸掘るや　佐々木重満

◆無所属

この秋や話し相手に友夢に　小林永以子
雨止んでむんと森の香やんまゆく　畠　梅乃
夕立来て日向の匂ひ立ちのぼる　出澤　洋子
ゆっくりと歩きたくなる靴大花野　北村　文江
新酒酌む飲みつ振りよき孫二十才　一ノ瀬茂代
コンバイン轟音の中雀舞う　山本　すみ
秋声やバスの園児の「またあした」　岩楯惠津子
河口まで偽アカシヤが咲いてる長い枕　大石　雄介
せんだーどイーハトーブのあかのまま　大石　和子
秋涼し百会のツボを刺激して　山田　照子
荒波に出会いて晩夏愛滅ぶ　穂坂志げる
のばした膝畳の秋を引きずりて　小澤　園子
鍵穴の暮れる早さよ指の冷え　田畑ヒロ子

柿の皮剥きてこっそり首飾り　須田　聡子
眩しきはをとこの腕律の風　杉崎　せつ
赤い羽根足柄上郡大井町　瀬戸　正洋
鬼栗や五右衛門風呂を思い出す　岡田　典代
満月や八十路も末の誕生日　神野美代子
砂糖かけ白ご飯食ぶ生身魂　大佐田うづき
台風の停滞足して貼る切手　杉山あけみ

＊

◆お詫びして訂正します◆

小林永以子さんの句
（4月号681号9頁）
（誤）稜線の奥は明るき春薄暑
（正）稜線の奥は明るき春薄暮
（10月号687号7頁）
（誤）クラスごと来て椎どつさりと先先家
（正）クラスごと来て椎どつさりと先生家

＊

第四十六回笛まつり俳句大会

（みなみ俳句協会）

令和六年九月二十九日　於・南足柄市女性センター
応募句数　四百五十句　当日参加人数　四十七名
兼　題　「笛又は蜩」「水澄む又は秋の水」

兼題の部　入賞作品

南足柄市長賞
天高しみな胸反らす鼓笛隊　清水　呑舟
南足柄市議会議長賞
友禅の花鳥流るる水の秋　中村　敬
南足柄市教育長賞
蜩や別れは水の引くように　岡本　保

席題の部　入賞作品

席題「こすもす（秋桜）」「秋季雑詠一句」

観光協会会長賞
虫に野を返して今日の足洗う　市川めぐみ
県俳句連盟会長賞
ホームラン音も絵になる秋夕焼　岩本　文代
小田原俳句協会会長賞
国取りの大綱引きや豊の秋　荒　理依子

鷹羽狩行と私

池田　忠山

一　はじめに

鷹羽狩行が93歳で令和6年5月27日逝去した。

グループ香雨「梅ごち」の前身は、狩行が平成30年12月まで主宰だった「狩」誌の小田原支部で、また、現在の九名全員が同グループ所属として当協会員になっている関係で、村場会長から「梅ごち」代表の小生に追悼文をと心あたたまるお声がかかった。小生は感涙を抑えてお受けした。

二　狩行の足跡と主な作品

狩行は、俳人協会（全国約二千五百人）を、平成11年理事長、同14年会長として、同29年まで牽引した。

ここで、実作句を主な句集で拾ってみる。

天瓜粉しんじつ吾子は無一物　『誕生』昭40
摩天楼より新緑がパセリほど　『遠岸』昭47
空蟬のなほ苦しみを負ふかたち　『五行』昭49
紅梅の枝々は空奪ひあひ　『月歩抄』昭50
湖といふ大きな耳に閑古鳥　『六花』昭52
しみじみと端居の端といふところ　『七草』昭56
水音は川幅を出ず猫柳　『十四事』平13
年迎ふ山河それぞれ位置に就き　『十五峯』平16
ふためぐりならぬ人の世天の川　『十六夜』平21
ぼんぼりに灯の入るまでは夕桜　『十八公』平25

（その間、第一句集『誕生』で俳人協会賞、『十五峯』で蛇笏賞と詩歌文学館賞をダブル受賞。）

三　狩行俳句の真髄

狩行の俳句の真骨頂は、見てきたとおり、向日性、外光性、叙情性にあると私は思う。狩行は、昭和40年に俳人協会賞を受賞しているが、それまでの俳壇は、社会性俳句、前衛的俳句、療養俳句であふれていた。狩行は、そういうものとは無縁であった。「無思想」などと批判する向きもないではなかったが、狩行はこれを無視し、ひたすら実作を以て、俳壇やメディアの世へ問うた俳句を発信し続け、俳壇の空気を変えた。

四　狩行と私

私は狩行に師事して21年間であったが、この間の狩行との思い出としては、「狩」投句二回目で秀句佳句欄にとり上げられたこと（平15）、雑詠欄の巻頭に二回とり上げられたこと（平19、21）、雑詠欄の10句鑑賞を半年間担当させてくれたこと（平23）、芦ノ湖畔のホテルでの約一三〇人の同人総会の晩餐会のくじ引きで、狩行の隣の席を当てたこと（平26）、など、多々あるが、最も思い出深かったのは、ＮＨＫ全国俳

句大会第5回飯田龍太賞を得た15句『水』で、狩行が表彰のためＮＨＫホールに登壇して下さったことだ。（平31）。

この年、狩行は一般の部の選者は退任していたのでもともと大会に出場の予定はなかった。私がＮＨＫの担当者と表彰スケジュールの打合せをしたときにも、狩行の出場予定はなかった。しかし直前になって、ＮＨＫから狩行が龍太賞トロフィーを授与し、講評を行うという連絡が入った。その変更の理由はわからなかったが、私はふるえるほど嬉しかった。当日狩行は役目が終ると舞台裏に私を呼び出し、美智子夫人からの伝言「龍太賞、おめでとうございます。」を私に伝えて下さった。夫人は「狩」の同人に私と同期指名だったのだ。私は思いがけなさに返す言葉を失った。狩行は「今日まで受賞を他言できなくて、さぞ辛かったことでしょう。」とねぎらいの言葉を残されてタクシーに乗りこまれた。この二つの言の葉は、今も耳に残って離れない。

狩行が登壇となった経緯を、いつかお尋ねしようと思ったが、今となっては確かめようがない。それでいいと思っている。

五　私の「狩行の一句」

香雨誌には、この程、選んだ狩行の一句に〈**流星の使ひきれざる空の丈**〉を提出したが、今はやはり

人の世に花を絶やさず返り花　『十二紅』平7

を挙げようと思う。狩行を失ってみると、この返り花は（本人はそうではないと言われるかも知れないが）、狩行を象徴している、否、狩行そのものではないか、と思えてならないからである。

私は、今もって「狩行ロス状態」が癒えないが、訃報報道から二週間で香雨誌に投じた片山由美子入選5句のうち、3句を記して、狩行を悼みたい。

師に永久の眠りはあらじ合歓の花　　忠山
短夜の明けぬひと夜となりにけり
ほうたるへもはやどの手もとどかざる

私は、これからは、なろうことなら、狩行の教えを受け継ぐことのできる俳句の作り手の一人となり続けたいと心に期している。

俳句おだわら鑑賞（令和6年9月号）

田中　幸子

山百合や地下千尺の水旨し　　加藤　富江

深いみどりの中、清らかな山百合の白大輪が香り高く山風に揺れるさまは、夏の山野草の王様だ。〝地下千尺の水〟とはすごい直喩。想像のつかない地下千尺の奥から闇を抜け湧き出る清水。冷たい！旨い！は言うまでもない。一幅の山水画。香り彩りが見え、せせらぎの音も聞こえる。未曽有の酷暑を吹っ飛ばす夏の〝涼〟の醍醐味に出会ったような一句。旨い水ごちそうさま。

古屋徳男

山百合や地下千尺の水旨し　　加藤　富江

吟行会の景か。散策の路脇に山百合が芳香を放つ。その脇から清水が輝いて湧いている。思わず手に掬い乾いた喉を潤す。喉を通る水は青々としていた。二物衝撃の句で読者に景が広がります。「地下千尺」実際にはあり得ない深さですが、借り物でない言葉が印象的で心揺さぶる句になりました。作者の感性の鋭さに敬服致します。

新作５句

荒井ちゑ子

萩小道交わす言葉の鮮しき
風あれば風にまかせる芙蓉かな
からすみをごくうす切りに新酒かな
庭先の朱き鳥居や白むくげ
沿線の鉄路のさびや草の花

高杉掘三朗

山頂を隠さんばかり稲架襖
小さき手に小さき刷子や墓洗ふ
新蕎麦を締むる手さばき三代目
パレットに赤絞り出す秋の朝
炊きたてを先づは供へて今年米

中根　和子

見霽かす水平線や尉鶲
秋蝶や沢音に足軽くなる
小笊手に椎茸狩の眼となれり
函嶺の風を自在に花すすき
新蕎麦や大内宿の藁庇

横塚　昌平

先鋒を悟空が征くか鱗雲
ちちははの温顔うかぶ門火かな
稲光見馴れし山を厳めしく
好物を思ひ出すなり盆の月
吾が鼓動以外一切虫の闇

城苑俳句・冬の部

（合同句集第十二集35～49頁より近藤久江抄出）

後半は軽く歩こう石蕗の花　勝木　澄子
元朝や真白き富士と稲藁と　加藤　幾代
水底のような家並み寒月光　加藤かほる
梵鐘の音色も年を越しにけり　加藤　健治
九十年プラス思考や障子貼る　加藤　幸子
円光の景やはらかや初鴉　加藤　富江
日の本の空気清浄初日の出　加藤　春江
家中の物音読みて風邪籠り　加藤まり子
尼寺の美しき尼障子貼る　加藤れい子
北風の掠れて青き日本海　門松　鳳文
冬ごもり炭疽菌のひそむ国　神山つとむ
初日の出万歳叫ぶ入院棟　川合　昌子
雄鶏のとさか光れり今朝の冬　川本　育子
初霜やエーデルワイスの歌を聴く　河本　純子
原野へと消ゆる四駆や雪女　北崎　修
北風に攫はれさうな無人駅　北村　文江
冬の夜の話し相手の玩具犬　木村　和彦
夕さりの牛の長啼き大根干す　木村　幸枝
追伸に今年限りとある賀状　久津間百合子
綿虫や日ごとに変る山の影　國島　五月
冬耕や晴れて雅の化粧富士　久保寺トミ子
雪女郎いまはのきはの京ことば　小島ノブヨシ
白障子閉ざして心やすらぎぬ　小瀬村信子
冬晴や明治を守る醤油倉　小林永以子
指に拭くグラスの紅やクリスマス　小林　環
雪の駅足湯は温し人ぬくし　小宮　早苗
寒木瓜や社宅のままの本籍地　近藤　絢子
円相の輪の中にをり臘八会　近藤　久江
冬日背の待つたのしさよ鰻飯　西賀　久實
気嵐の湖に水鳥静かなり　齊藤　桂

令和六年 年間ベスト一句集案内

一、全会員に、令和6年中の作品からベスト一句を自選していただきます。協会報とは限らず各人の全発表作品を対象として下さい。
一、各グループごとにとりまとめて下さい。グループの責任者には別途そのお願いをさし上げます。
一、無所属の方は、広報部あて「ベスト一句集」としてはがきで送稿して下さい。
一、〆切り　令和7年1月10日（2月号掲載）
一、送稿先　〒250-0042 小田原市荻窪五四九ー一七
小田原俳句協会広報部　村場十五

第61回小田原梅まつり俳句大会

第一部　作品募集

兼　題　「梅」（春に限る）「余寒」（いずれも傍題可）各一句一組　未発表作品に限る
締　切　令和六年十二月二日（月）必着
整理費　一組に付き千円（何組でも可）
投句先　〒250-0851 小田原市曽比二四三二
米山　翠☎〇四六五―三六―四五九〇
＊作品は原稿どおり印刷します。
選　者　協会役員及び各地区有力作家（投句者に限る）
賞　県知事賞以下二十位まで　選者特選賞六人

第二部　俳句大会

日　時　令和七年二月九日（日）
会　場　おだわら市民交流センター（ＵＭＥＣＯ）
受　付　十一時　投句締切：十二時　開会：十二時半
整理費　五百円（呈飲料）
席　題　春季雑詠一句と席題当日発表一句　総互選
賞　市長賞以下五十位まで（結社賞含む）参加賞
（主催）小田原市観光協会　（主管）小田原俳句協会
（後援）各地区俳句協会
＊各グループは当日までに結社賞をご用意下さい。
＊会場は飲食可能です。マスク着用など感染症防止対策にご協力ください。

小田原俳句協会　〒二五〇―〇〇四二　小田原市荻窪五四九―十七　村場　十五方

第14回おおいゆめの里俳句大会

第一部　作品募集

兼　題　「朧」「菫」（いずれも傍題可）各一句一組　未発表作品に限る
締　切　令和七年一月九日（木）必着
整理費　一組に付き千円（何組でも可）
投句先　〒258-0019 足柄上郡大井町金子一一四一
小野菊土☎〇四六五（八三）〇八八〇
＊作品は原稿どおり印刷します。
選　者　俳句協会役員及び各地有力作家（投句者に限る）
賞　町長賞以下十五位まで

第二部　俳句大会

日　時　令和七年三月八日（土）
会　場　町立そうわ会館（大井町山田五〇二）駐車場完備
☎〇四六五（八五）一六〇一
送迎バス小田急線新松田駅十時
受　付　十時　投句締切：十一時三〇分　開会：十二時
整理費　五百円（飲み物呈）※昼食は各自ご持参下さい
席　題　春季雑詠一句と当日発表席題一句　相互選
賞　三十位まで
（主催）おほゐ俳句会
（後援）大井町　大井町教育委員会　大井町文化団体連絡協議会　小田原俳句協会　神奈川県俳句連盟　各地俳句協会